

寺井美津子モダン
ダンスリサイタルⅣ

藤田佳代舞踊研究所

4度目の寺井美津子のリサイタル。幕開けは新作の「国境線」、スイスとフランスの国境線上に建つホテル・フランコ・スイスを紹介した紀行文「テーブルの真ん中をほしめる国境線をほさんで、今日も恋人たちが愛を語る」に触発されて創った作品だという。ちょうど制作時期はシリア難民などのニュースが連日流れていた頃。たくさんの悲しみを生む国境線、その同じ線を挟んで恋人たちが……ということに希望を見いだそうとする思いが感じられる柔らかな群舞に仕上がっていた。

金沢景子と寺井自身が踊る「われたらすゑは」、菊本千永、かじのり子、

向井華奈子と実力派ダンサー3人が踊った「ジキルとハイドとわたし」、6人の踊り手による「夜明けの詩」と寺井作舞のさまざまなタイプの作品が上演された後、寺井自作自演の「倚りかからず」。自らがどう生きていくのか、その意志を感じる作品、強く、同時に柔らかなさを持って「決意」を毅然と表現する。観ている私自身、自らの生き方を正したくなるような引き込まれる作品だった。

最後は師である藤田佳代が作舞した「来る」。二千年ほど前のハスの種から芽が出て花を咲かせていること、そんなハスの花(時)と、命のないの化石(非時)が同時にある——そんなことを素朴な優しい視点で見た作品。寺井は釣り人で出演、ハスの花を踊ったジュニアのダンサーにも香り立つような魅力を持つ人がいて興味深く観た。

藤田佳代独特の舞踊世界がひろがる

自作自演もみせた寺井美津子リサイタル

藤田佳代舞踊研究所では、所属の金沢舞子、菊本千水、かじのり子、向井舞奏子らに作品発表の機会を与え、舞踊作家を育成してきた。今回は寺井美津子の奮で、二〇一一年十一月に次いで四回目のリサイタルとなる。

最初の「国境線」は寺井の自作自演。まず色彩を闊にする衣裳の二組の群舞により、国と国が接する地域にみながる緊張感を見せる。藤田佳代が法舞臺二、島子親子から受け継ぎ今につないできた、少ない動きを絶妙に配置して緊迫した情景を表現する手法の

舞踊評

群舞は、国境が見えなくなる和合の場面を醸立させた。

次いで、菊本千水、かじのり子、向井舞奏子というベテラン三人の個性の対比を生かした「ジキルとハイド」とわたり、「次の世代を担う平岡舞臺、田中文典、朝原麻衣子、中園くみ子、佐藤茉莉、木村はなを踊らせた「夜明けの詩」があった。そして寺井自身が先賢格の金沢舞子に迫る「わたさすまは」となり、さらにソロ「傍りかからず」で自身の今の姿を観客に示し、このリサイタルの焦点とした。最後は、いつも藤田佳代が付の群舞作品で締めくくられる。今回は「来る」だった。約りの寺井が舞臺で筆を振り、

菊本千水、かじのり子、向井舞奏子、石井麻子、平岡舞臺らの「化石」を次々と客席から釣りあげる。中には長い間地中に埋まっていたながら、その眼から覚めて舞を映かせる「大賀ハス」のような珍品もある。その生命の奇跡をのどかに描いた舞踊が「来る」だった。

藤田佳代舞踊研究所は、総力をあげて取り組む「公演」制作に重点を置く「創作実験劇場」。主要メンバーによる「リサイタル」、次の世代の成長を確認する「発表会」と場を取りそろえ、技法の継承、発展を図ってきた。ここには藤田独特の舞踊世界が横がり、それを観客の確かな反応が支える良い関係が出来ている。(十一月十九日 西宮市プラホール) 山野 博大



寺井美津子モダンダンスリサイタルⅣより「傍りかからず」(11月19日、西宮市プラホール)演出・作舞・寺井美津子、芸術監督・藤田佳代、舞台監督・長島元伸、照明・新田三郎、音響・藤田登